

2021 年度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

プロジェクト名	ソーシャルデザインリーダーシップ(SDL)の開発・実践プロジェクト
研 究 所 名	実践女子大学ソーシャルデザインリーダーシップ研究所
設 置 開 始	2019. 4. 1
設 置 終 了	2023. 3. 31

<研究業績報告書>

今年度の研究計画の概要

本研究の目的は渋谷エリアを中心に、ソーシャルデザイン領域でのリーダーシップ、すなわち「ソーシャルデザインリーダーシップ（以下、SDL）」の機能を解明し、育成可能性を開発することにある。具体的には（１）SDL の理論的枠組み構築、（２）PBL 科目やボランティアの履修者・学生スタッフへのアンケート調査・分析、（３）渋谷区役所や在渋谷企業などステークホルダーへの聞き取り調査やディスカッションによる渋谷版 SDL の開発、（４）渋谷版 SDL 実践、を異分野融合および地域・産学連携によって実施し、渋谷における SDL のあり方およびその開発手法を実装する。

しかし Covid-19 の影響が継続し、大人数でのフィールドワークの実践とその調査・分析を行うことは困難な状況が継続している。また社会の側に大きな変化が見られ、オンラインやサイバー空間でのやり取りを含んだ社会へと一段と進展した。そこで、ワーケーションやオンラインでの PBL、オンラインでのグループワークなどにも視野を広げ、「オンラインとオフラインの融合」した社会での SDL についても検討を行うこととした。

今年度の研究実績

オンラインでの SDL も視野に、以下の活動を実施した。

<対面場面での SDL に関するもの>

- ・早稲田大学 LDP のリーダーシップ開発授業の見学、聞き取り
- ・SDL を題材とした PBL 授業の実施
- ・地域社会の開発に関する PBL 活動
- ・アートワークショップにおける SDL 発生の観察
- ・ものづくりのデザインから得られる SDL 発生の観察

<オンライン場面での SDL に関するもの>

- ・学生がオンラインコミュニケーションで経験した困難に関するインタビュー調査
- ・オンラインでのグループコミュニケーションに用いるソフトウェアの比較

- ・オンライン面談におけるソーシャルスタイル質問紙の試作
- ・ワーケーションとその影響に関する調査
- ・食に関するコンテンツの未来を題材とした企業連携 PBL 活動
など

<p>現在までの進捗状況</p>
<p>1. 事業計画の進捗度について (①～④のいずれかを選択してください)</p> <p>①順調である ②おおむね順調である <input checked="" type="checkbox"/>③やや遅れている ④遅れている</p>
<p>※上記の進捗度を示す事由を記載のこと。「やや遅れている」「遅れている」とした場合は、改善点を記載。(計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること)</p> <p>初期の計画では、渋谷をはじめとした地域でのフィールドワークや、学内での対面授業における一定規模のグループワーク、またリーダーシップを発揮させる機会である学外での活動などが必須であった。しかし、Covid-19の影響により、特に対面での大規模活動場面の実践、調査、分析が中断、停滞している。一方で、オンライン活動、サイバー空間での活動への社会自体が急速に変化している。そのため、オンラインやサイバー空間、またオンラインとオフラインが融合した社会でのSDLについて検討を進めている。</p>
<p>2. 目標達成状況について (①～④のいずれかを選択してください)</p> <p>① 達成した ②おおむね達成した <input checked="" type="checkbox"/>③十分達成されたとはいえない ④未達成である</p>
<p>※上記の目標達成状況を示す事由を記載のこと。「十分達成されたとはいえない」「未達成である」とした場合は、改善点を記載。(計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること)</p> <p>比較的小規模の活動や調査で、ある程度の成果を上げてきたが、当初計画通りの目標が達成できたとは言い難い。特に、大規模集団を対象とした活動のデザインや、リーダーシップについて調査、分析する機会がなかった。一方で社会の側に大きな変化が起きているため、それに適応し、オンラインやサイバー空間、またオンラインとオフラインが融合した社会における活動のデザインや、リーダーシップについて解明を進めている。</p>

<p>取り組み状況について</p>
<p>1. 組織的な取り組みができているか (①～④のいずれかを選択してください)</p> <p>①できている <input checked="" type="checkbox"/>②おおむねできている ③あまりできていない ④できていない</p>
<p>※上記を示す事由を記載のこと。「あまりできていない」「できていない」とした場合は、改善点を記載。</p> <p>上記「今年度の研究実績」や「進捗状況」に記載の通り、計画の変更に伴う再調整がやむを得ない状況である。その中でも、研究員メンバーがそれぞれ事例収集、ワークショップの実施などを分担して行っており、おおむねは組織的な取り組みができていると考える。</p>
<p>2. 研究所メンバーの活動状況について</p>

※分担された役割を含めた活動状況をメンバーごとに記載してください。

粟津は、学生がオンラインコミュニケーションで経験した困難に関するインタビュー調査を実施した。この内容は、学術論文として公開された。また、オンラインでのグループコミュニケーションに用いるソフトウェアの比較を行った。oVice、Zoom、Gather Townなどを比較し、それぞれの特性に応じて使い分けることとした。

原田は、食に関するコンテンツの未来を題材とした企業連携 PBL 活動を実施した。概要をリーフレットにまとめ、研究室 HP(http://kenharada.la.coocan.jp/common/img/pdf/PBL2021leaflet_web.pdf)にて公開した。

松下は、地域においてアフターコロナを見据えたソーシャルデザインをどのように展開するかについて鳥取県、静岡県南伊豆町などでフィールドワークを行いつつ調査した。また「実践プロジェクト b」においては ANA と連携し、若者層に向けた旅行商品の開発をテーマに PBL を行った。先輩学生を LF (Learning Facilitator) として活動してもらいオンラインを含めたリーダーシップ行動について実践・分析を行った。

下山は、長引くコロナ禍により、一昨年より進めていた『京都大学「花山天文台」でのインスタレーションワークショップの実施と調査』についての実践が無期延期となった。

そのため別の舞台として、毎日新聞社、毎日メディアカフェ、毎日小学生新聞の主催による企業・団体の小学生向け出前授業を一堂に集めた「学びのフェス」と、正課授業「実践プロジェクト b」「デザイン実習 d」での研究を行った。参加・履修した学生の主催者側としてのアートワークショップへの参加や、具体的なものづくりのデザインと発表から、アート・デザインにおける SDL 発生の観察を行った。

成果について

1. 波及効果が見込まれる成果が得られているか

※上記の状況を示す事由を記載のこと。(波及効果については、主に事業終了後の発展を問うものであるため、設置申請書で示した波及効果および教育又は社会に還元するために得られる知見に対し、現在の見込みを記載してください。申請時との差異がある場合も、その旨記載してください。)

本研究の波及効果および教育・社会に還元しうる知見としては、主に以下の3点である。

- 1) SDL の機能解明および開発手法：SDL 育成に関する正課内外の取り組みが、渋谷地域やオンラインでの活動にどの程度有効か、どのように改善・修正すべきかなどに関する情報が得られている。さまざまな SDL、PBL、ワークショップなどの実践を通して知見が蓄積されており、教育への還元と確認が進められている。また講演や取材対応などを通して社会的な波及も展開されている。今後も継続して、還元、波及が行われる予定である。
- 2) 地域・産業との連携：渋谷あるいは他地域の自治体や企業、団体との連携活動を実施することで、相互の結びつきが形成されている。これは、本研究の終了後にも維持されるであろう。
- 3) 本学の教育への還元：本学の正課内外における PBL の運営、学生リーダーの運用、特に人間社会学部における今後のソーシャル・デザイン科目の方向性を検討する基盤となっている。

以上のことから、ある程度は、事業終了後の波及効果が見込まれる成果が上がっていると判断する。しかし一方で、Covid-19の影響により、特に対面での大規模活動場面の実践、調査、分析が中断、停滞しており、当初計画通りの成果が得られているとは言い難い。

2. 雑誌、学会発表、図書など

各研究員の2021～2022年度における業績のうち、本研究所に関連するもののみを記載する。

<著書>

- ・松下慶太 (2022) 『ワーケーション企画入門』学芸出版社
- ・Keita MATSUSHITA (2021) Reconfiguring Workplaces in Urban and Rural Areas: A Case Study of Shibuya and Shirahama, Japan. In Will-Zocholl, Mascha and Roth-Ebner, Caroline (eds) *Topologies of Digital Work: How Digitalisation and Virtualisation Shape Working Spaces and Places (Dynamics of Virtual Work)*. Palgrave Macmillan. pp. 149-169
- ・Keita MATSUSHITA (2021) Workation and the Doubling of Time and Place. In: Hidenori, T. (eds) *The Second Offline Doubling of Time and Place*. Springer, Charm. <https://doi.org/10.1007/978-981-16-2425-4> pp. 105-120
- ・Keita MATSUSHITA (2021) Workations and Their Impact on the Local Area in Japan. In: Orel M., Dvouletý O., Ratten V. (eds) *The Flexible Workplace*. Springer, Cham. pp. 215-229.

<学術論文>

- ・粟津俊二 (2022) Covid-19 禍のオンライン・コミュニケーションにおいて大学生はどのような問題を経験したか—インタビューによる予備調査—. 実践女子大学人間社会学部紀要, 18, 101-110.
- ・Takeuchi, M., Yokoo A., Takahashi, K., Awazu, S. Takeda, H. & Suzuki, M. (2021) The Structure of Images of Career and Life Plans in University Students: Cognition of Their Roles and Gender Identity. 実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報, 7, 35-58.
- ・松下慶太 (2022) 「ワークプレイス化する郊外—ベッドタウンからベスタウンへ」『都市計画』355号、pp. 66-69
- ・松下慶太 (2021) 「ワークスタイル・ライフスタイルの柔軟化によって都市が求められるもの」『都市とガバナンス』vol. 36、pp. 32-38
- ・小林江里香・原田謙・斎藤民 (2021) 「都市部の中高年就労者における地域活動への参加」『老年社会科学』43(1): 36-48.
- ・原田謙 (2022 印刷中) 「ウィズコロナ・ポストコロナ時代における「幸福な老い」」『生きがい研究』28: 4-15.

<講演、活動、学会等発表>

- ・粟津俊二, 金谷春佳, 加藤奈々. (2021) 恋愛要素のある二次創作物への嗜好: 夢女子の恋愛観. 日本認知科学会第38回大会.
- ・松下慶太 (2021) 講演: 「ワーケーション 2.0 地域と共創するワーケーション」福島グリーン復興ワーケーション

・松下慶太（2022）講演「鳥取中部が目指すべきワーケーション」鳥取中部ワーケーション講演会

・松下慶太（2022）講演「ハイブリッドワークと地方のあり方」とっとり発新しい働き方セミナー

・松下慶太（2021）講演：「コロナ禍以降のソーシャルメディアとコミュニケーション・スタイルー リモートネイティブ世代に注目してー」SRM クロスオピニオンセミナー

・松下慶太（2021）講演：「ワーケーション 2.0 地域と共創するワーケーション」福島グリーン復興ワーケーション

・下山肇（2022）『デザインのひみつを知ろう～「これ何に見える？見立ての体験」』 毎日メディアカフェ&毎日小学生新聞 学びのフェス 2022 春. 2022 年 3 月 25 日. 実践女子大学渋谷キャンパス. 主催：毎日新聞社、毎日メディアカフェ、毎日小学生新聞

※上記活動に関する web 記事

デザインのひみつを知ろう～「これ何に見える？見立ての体験」』（2021 年 4 月 5 日）

毎日新聞『大学倶楽部』

Website : <https://mainichi.jp/univ/articles/20220404/org/00m/100/004000c>

学びのフェス Website : <https://www.manabi-fes.net>